全力で生きるすがすがしさに溢れる8作品です。

16回を数える「ミューズ シネマ・セレクション 世界が注目する日本映画たち」
本年ご覧いただく8作品は、人の美しさや濁りのない心を、さまざまなスタイルでみせてくれる時間になりそうです。
どんなに時代が変わり、状況が変わっても、かわらないもの、輝くもの、がある。
このことを、いろいろな方向から、じっくりと表現するのが、「創作」というもの、「映画」というものかもしれない。
改めてそんなことを想う本年のラインナップを、是非、ご友人、ご家族、お誘いあわせて体験していただけることを願っています。
皆様のご来場を、お待ちしております。

全上映回でゲスト来場を予定。
上映後、ゲストによるトークショー＆サイン会を開催します。

タイムテーブル

＊開場は、上映開始の15分前です。

2016年3月

19（土）

●13:30〜
『あん』カラー／113分

©2015 映画「あん」製作委員会/COMME DES CINÉMAS/TWENTY TWENTY VISION/ZDF-ARTE

●16:45〜
『ぼくたちの家族』カラー 117分

©2013「ぼくたちの家族」製作委員会

20（日）

●11:00〜
『滝を見にいく』カラー 88分

©2014「滝を見にいく」製作委員会

●13:45〜
『夢は牛のお医者さん』カラー 86分

©TeNY

●16:30〜
『岸辺の旅』カラー／128分

©2015「岸辺の旅」製作委員会／COMME DES CINÉMAS

21（月・祝）

●11:00〜
『トイレのピエタ』カラー 120分

©2015「トイレのピエタ」製作委員会

●14:15〜
『ジヌよさらば〜かむろば村へ〜』カラー 121分

©2015 いがらしみきお・小学館／「ジヌよさらば ～かむろば村へ～」製作委員会

●17:30〜
『野火』カラー／87分

©SHINYA TSUKAMOTO/KAIJYU THEATER

チケット発売日：2015年12月23日(水・祝)

［料金］全席指定
- ●1回券（日時指定）：［Pコード：555-052］800円
- ●1日券（日にち指定・限定160席・前売りのみ）：［Pコード：555-053］19日：1,300円 20,21日：2,000円

［お求め先］
ミューズチケットカウンター：04-2998-7777（電話 10:00-18:00）（窓口 10:00-19:00）
チケットぴあ：0570-02-9999
ローソンチケット：0570-000-407（10:00-20:00）

※ 区域「前方」「中央」「後方」「バルコニー」「2階席」のいずれかを選んでご購入いただけます。
※ 1日券は「中央」「後方」のみとなります。
※ ミューズチケットカウンターでご購入の場合、直接座席を指定することができます。
※ 開場は各上映開始時刻の15分前からとなります。
※ 上映後は映写機チェックのため、いったんロビーにご退場いただきます。
※ 前売券は開催前日まで販売しております。尚、チケットぴあでの前売券予約は開催4日前までとなります。

●未就学児の入場はご遠慮いただいております。
●やむを得ない事情により、ゲスト・プログラム等変更になることがございます。ご了承ください。
●上映開始後は場内が暗くなるため、お手持ちのチケットの座席にご案内できなくなりますので、上映開始時刻に遅れないようご注意ください。

［協力］ウッキー・プロダクション、株式会社 エレファントハウス
有限会社 海獣シアター、松竹株式会社メディア事業部
松竹ブロードキャスティング株式会社、株式会社 東和プロモーション
株式会社 博報堂DYミュージック&ピクチャーズ
株式会社 ファントム・フィルム

［企画制作］ぴあ株式会社 PFF事務局

［会場］
所沢市民文化センター ミューズ マーキーホール
〒359-0042 埼玉県所沢市並木1-9-1

西武新宿線・航空公園駅東口より徒歩約10分・バス約3分
［航空公園駅まで］
■ 西武新宿駅より約40分 ■ 西武池袋駅より約30分（所沢駅乗り換え）
■ 国分寺駅より約20分（東村山駅乗り換え） ■ 本川越駅より約20分
［注意事項］駐車場は大変混雑いたしますので、電車・バスのご利用をお勧めします。

［主催・お問い合わせ先］
公益財団法人 所沢市文化振興事業団
04-2998-6500 〒359-0042 埼玉県所沢市並木1-9-1
http://www.muse-tokorozawa.or.jp

第16回 ミューズ シネマ・セレクション
世界が注目する
日本映画たち
所沢市民文化センター ミューズ マーキーホール

2016年3月

19日（土）
『あん』監督：河瀬直美
『ぼくたちの家族』監督：石井裕也

20日（日）
『滝を見にいく』監督：沖田修一
『夢は牛のお医者さん』監督：時田美昭
『岸辺の旅』監督：黒沢 清

21日（月・祝）
『トイレのピエタ』監督：松永大司
『ジヌよさらば〜かむろば村へ〜』監督：松尾スズキ
『野火』監督：塚本晋也

全上映回でゲスト来場を予定。
上映後、ゲストによる
トークショー＆サイン会を開催します。
ツイッター、フェイスブック、
公式HPで詳細を発表します。

@muse_cinema　musecinema
http://www.muse-tokorozawa.or.jp
所沢ミューズ 検索

※やむを得ない事情により、
ゲスト、プログラム等変更になることがございます。ご了承ください。

3月19日(土)13:30～ 『あん』（カラー／113分）

©2015 映画「あん」製作委員会/
COMME DES CINÉMAS/TWENTY TWENTY VISION/ZDF-ARTE

監督・脚本：河瀬直美　原作：ドリアン助川
出演：樹木希林、永瀬正敏、内田伽羅、市原悦子

桜並木の下で小さなどら焼き屋をきりもりする千太郎。ある日、ここで働きたいと現れた老女の徳江がこしらえる粒あんは絶品で、店は大繁盛するのだが…。ドキュメンタリー映画から出発し、これまで劇場映画でも一貫してオリジナル作品をつくり続けてきた河瀬監督が、初めて原作をもとにした記念碑的作品。ハンセン病を経験した徳江を軸に、生きる意味や幸せについて静かに問うドリアン助川の小説を読んだ河瀬監督は「これを映画化させないといけない」という使命感に突き動かされた。樹木希林や永瀬正敏らの名演と、桜や深い緑の木々、そして小鳥が、徳江と千太郎の魂の交感を、生きる喜びを見事に描き出して、魂が揺さぶられる。

河瀬直美（かわせ・なおみ）

1969年奈良県生まれ。97年、劇場映画デビュー作『萌の朱雀』でカンヌ国際映画祭カメラドールを史上最年少受賞。2007年、『殯の森』で同映画祭審査員特別大賞グランプリ受賞。13年には「2つ目の窓」が同映画祭コンペティション部門に正式招待された。

第68回カンヌ国際映画祭「ある視点」部門オープニング上映作品
第1回バレッタ映画祭（マルタ共和国）最優秀作品賞、最優秀女優賞
第6回オデッサ国際映画祭（ウクライナ）クロージング上映作品
第60回バリャドリード国際映画祭（スペイン）最優秀監督賞
第39回サンパウロ国際映画祭 観客賞

私はただ泣いたばかりではなく、喜びの涙も流した。『あん』の完成度の高さに満足したからだ。これは河瀬監督の最高傑作にして最も成熟した作品だ。
バーバラ・シャレス／RogerEbert.com

3月19日(土)16:45～ 『ぼくたちの家族』（カラー／117分）

©2013「ぼくたちの家族」製作委員会

監督・脚本：石井裕也　原作：早見和真
出演：妻夫木 聡、原田美枝子、池松壮亮、長塚京三、黒川芽衣

長男は結婚し、会社勤め、次男は大学生。今は父母だけが郊外の一軒家で平穏に暮らしているが、ある日、母が余命1週間を宣告されてしまう。原作小説を読んで「僕自身の話だ」と驚いた石井監督は、「本気で家族と向き合い、新しい世代の感覚で家族を描きたかった」と語る。母の発病により、父の不甲斐なさと多額の借金が明るみになり、長男の浩介はすべてを自分で背負わなければと奔走する。童女のように明るい母親。おろおろするばかりの父親。重圧にじっと耐える浩介。のほほんとしながら言いたいことをズバリという次男・俊平。4人のセリフと表情と間合いが実にリアルで、緊迫の場面に笑いを持ち込む石井ワールドの真骨頂が堪能できる。

石井裕也（いしい・ゆうや）

1983年埼玉県生まれ。大阪芸術大学の卒業制作『剥き出しにっぽん』（2007年）で注目され、第1回エドワード・ヤン記念アジア新人監督大賞受賞。以降、『川の底からこんにちは』（10年）、『舟を編む』（13年）、『バンクーバーの朝日』（14年）などを手掛けた若き巨匠。

第38回モントリオール世界映画祭World Greats部門
第19回釜山国際映画祭A Window on Asian Cinema部門
香港アジア映画祭Cineaste Delights部門
サンディエゴ・アジア映画祭Masters部門
カイロ国際映画祭Special Presentation

小津安二郎監督の偉大なる人間ドラマをも思い起こさせる『ぼくたちの家族』は、最悪の診断と長期間隠されていた経済的問題によって引き裂かれる家族を描く。うちのめされるような感動を呼ぶ作品だ。
フランク・シェック／The Hollywood Reporter

3月20日(日)11:00～ 『滝を見にいく』（カラー／88分）

©2014「滝を見にいく」製作委員会

監督・脚本：沖田修一
出演：根岸遥子、安澤千草、荻野百合子、桐原三枝、川田久美子、德納敬子、渡辺道子、黒田大輔

幻の滝を見に行く温泉付き紅葉ツアーに参加した7人のおばちゃんたち。頼りないガイドと一緒に滝を目指して山登りを始めるが、気がつけば突然のサバイバル生活に突入！ 『南極料理人』『横道世之介』の沖田監督が、「40歳以上の女性・経験問わず」の条件でオーディション、演技経験のまったくない素人を含む7人をキャスティングし、オリジナル脚本を仕上げた。年齢も個性もバラバラなおばちゃんたちの、いかにもおばちゃんな生態の数々に笑いながら、人生経験豊富なおばちゃんならではの知恵とガッツで困難を乗り切っていく姿に、爽やかな勇気をもらえる。沖田組の常連俳優で頼りないガイドを演じる黒田大輔の好演も光る。

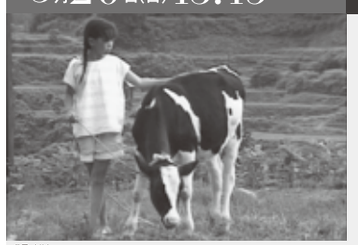
沖田修一（おきた・しゅういち）

1977年埼玉県出身。2009年、『南極料理人』で、国内外で高い評価を受ける。12年公開の『キツツキと雨』で東京国際映画祭審査員特別賞受賞。13年公開の『横道世之介』でブルーリボン賞最優秀作品賞などを受賞。最新作は『モヒカン故郷に帰る』。（16年3月広島先行、4月全国拡大公開）

第27回東京国際映画祭 日本映画スプラッシュ部門 スペシャルメンション授与
第34回ハワイ国際映画祭Spotlight on Japan部門
第18回上海国際映画祭パノラマ部門
第17回ウーディネ極東映画祭（イタリア）

さらにこの作品にプラスをもたらしているのが、ベテラン撮影監督の芦澤明子による映像の力だ。彼女のキャメラは、女性たちがあちこち歩き回るなか、一面が秋色に彩られた背景を美しく浮かび上がらせる。モーツァルトやシューベルトの室内楽がときおり挿入されるのも、心を湧き立たせてくれる。 デレク・エレイ／Film Business Asia

3月20日(日)13:45～ 『夢は牛のお医者さん』（カラー／86分）



©TeNY

監督：時田美昭（TeNYテレビ新潟）
ナレーション：横山由依（AKB48）

新潟県のローカル局が少女の夢の始まりから現在までの26年間を密着取材した感動の記録。東京1館、新潟3館での公開が反響を呼び、またたくまに全国50館以上に拡大。ミニシアターでは異例の公開4か月で約2万人の動員を達成した。1987年、新潟県の小さな小学校に3頭の子牛が“入学”、小学3年生だった少女・知美は、「牛のお医者さん」になる夢を抱く。少女がその夢をずっと忘れずにいることを取材記者だった時田監督が知ったのは、小学校の廃校から4年後のことだった。全校生徒9人の、純朴な子供たちの笑顔と涙。出稼ぎに行く男たちを見送る村人たちの姿。少女の強い意志と頑張り、それを支える家族の姿は、強く美しく、心が静かに清められる。

時田美昭（ときた・よしあき）

1960年新潟県生まれ。横浜放送映画専門学校（現・日本映画大学）卒業後、テレビ新潟に入社。主に報道部、制作部に在籍し、「ズームイン!!朝!」などを担当。報道記者だった87年に知美さんに出会い、その後26年間、密着。現在は報道制作局チーフディレクター。

第15回ニッポン・コネクション（ドイツ）ニッポン・ビジョン部門
カメラジャパン・フェスティバル（オランダ）

とても立派な作品です。堂々と生きている主人公によりそうようにしてこの作品を作った時田監督とスタッフに心からの賞賛をおくります。ここに登場する人たちは、日本人の鏡といっていいでしょうね。
山田洋次（映画監督）

3月20日(日)16:30～ 『岸辺の旅』（カラー／128分）

©2015「岸辺の旅」製作委員会／COMME DES CINÉMAS

監督：黒沢 清　原作：湯本香樹実　脚本：宇治田隆史、黒沢 清
出演：深津絵里、浅野忠信、小松政夫、蒼井 優、柄本 明

失踪していた夫が3年ぶりに突然帰ってきて、「俺、死んだよ」と妻に告げる。夫婦は、夫がこの3年間に過ごしてきた土地を訪ね歩く旅に出る。サイコサスペンス映画『CURE』で国際的に注目された黒沢監督にとって、初めて旅を、そして男女の愛を描いた、メロドラマ作品。夫・優介が妻・瑞希を連れて巡る「きれいな場所」は、田舎の小さな町や農村で、2人はかつて優介を世話してくれた人たちと数日間過ごす。瑞希は知らなかった彼の一面に触れ、彼への愛を深めていくが、同時に、死者への思いを断ち切れない人たちと出会う旅にもなる。黒沢監督の新境地を、深津絵里と浅野忠信の静かなる名演と稀有な存在感が見事に支える。

黒沢 清（くろさわ・きよし）

1955年兵庫県生まれ。1997年の『CURE』で国際的な注目を集め、2001年の『回路』でカンヌ国際映画祭国際批評家連盟賞受賞。2008年の『トウキョウソナタ』では同映画祭「ある視点部門」審査員賞とアジア・フィルム・アワードの作品賞を受賞した。

第68回カンヌ国際映画祭「ある視点」部門 監督賞
第40回トロント国際映画祭Contemporary World Cinema部門
第48回シッチェス・カタロニア国際映画祭コンペティション部門
第20回釜山国際映画祭A Window on Asian Cinema部門

『岸辺の旅』は、これまでの黒沢作品のように観客の心を狼狽させるというよりも、物悲しい気持ちにさせる。まるで午後の日陰のように忍び入って、感情を揺さぶるのだ。
マノヒラ・ダルギス／The New York Times

3月21日(月・祝)11:00～ 『トイレのピエタ』（カラー／120分）

©2015「トイレのピエタ」製作委員会

監督・脚本：松永大司　原案：手塚治虫
出演：野田洋次郎、杉咲 花、リリー・フランキー、市川紗椰、大竹しのぶ、宮沢りえ

画家への夢を放棄して窓拭きのアルバイトをする宏は、突然倒れ、余命3か月を宣告される。孤独で勝気な女子高生の真衣や入院仲間との出会いによって、宏の無為な日々は少しずつ変化していく。手塚治虫が病床で記した作品構想「トイレのピエタ」から着想を得た松永監督が、オリジナルストーリーを書き上げた。主演は人気ロックバンドRADWIMPSの野田洋次郎。青年の投げやりさ、絶望、怒り、優しさ、生への執着を、気負うことなく自然に表現して、これが初の映画出演とは思えない無比の存在感を示す。真衣を演じる杉咲花は、若手演技派として注目の存在。彼女の時に突飛な行動は躍動感にあふれ、宏の目にまぶしくきらめき、生への讃歌につながるのだ。

松永大司（まつなが・だいし）

1974年東京都生まれ。性同一性障害の現代アーティストを8年間追い続けたドキュメンタリー映画『ピュ～ぴる』を監督。2011年に公開され、ロッテルダム国際映画祭など数多くの映画祭に正式出品され絶賛された。『トイレのピエタ』は長編劇場映画監督第1作。

第16回全州国際映画祭インターナショナルコンペティション部門
第20回シュリンゲル国際映画祭Youth Film部門
第17回台北映画祭Future Lights部門

今わたしたちに必要なのは、慰めの物語などではない。ロウソクの火のようにやがて消えゆく人生を、なんとか掴もうとする青年を映したこの映画は、無気力の蔓延する現代に、強烈な炎の矢を放つ。
キム・ヨンジン（全州国際映画祭エグゼクティヴ・プログラマー）

3月21日(月・祝)14:15～ 『ジヌよさらば ～かむろば村へ～』（カラー／121分）

©2015 いがらしみきお・小学館／「ジヌよさらば ～かむろば村へ～」製作委員会

監督・脚本：松尾スズキ　原作：いがらしみきお
出演：松田龍平、阿部サダヲ、松たか子／二階堂ふみ／松尾スズキ／西田敏行

お金恐怖症になった元銀行マンの青年は、自給自足生活を夢見て寒村のボロ家に住みつくが、この村は異常に世話焼きな村長や写真好きの「神様」など、不思議キャラがいっぱいだった！ ジヌとは、東北地方の方言で「銭」「お金」のこと。学校も病院も銀行もない、高齢化率40%の東北の村で、1円も使わないのどかな田舎暮らしを夢見る主人公タケ。ヒートテックの重ね着で冬を乗り切るつもりだった読みの甘いタケを松田龍平がひょうひょうと演じて笑わせ、さらに、豪華キャスト演じる個性の濃い村人たちとの交流が実に楽しい。いがらしみきお作品初の実写映画化は、ハラハラドキドキの事件も起きつつ、のびやかに人間たちを讃える。

松尾スズキ（まつお・すずき）

1962年福岡県生まれ。「大人計画」主宰。2004年、初長編監督作品『恋の門』がヴェネチア国際映画祭に正式出品。そのほかの長編映画作品に、芥川賞候補になった自身の小説の映画化『クワイエットルームにようこそ』（07年）がある。俳優としての出演作も多数。

第18回上海国際映画祭SPECTRUM部門

楽しくて陽気なコメディにシュールリアリズムを加味した作品だ。西田敏行演じる「なかぬっさん」の場面が特に最高だ。村を徘徊する老人で、ほとんどいつも誰かの写真を撮っていて、ある者は彼を神様だと言う。
トム・ハント／Movie Buzzers

3月21日(月・祝)17:30～ 『野火』（カラー／87分）

©SHINYA TSUKAMOTO/KAIJYU THEATER

監督・製作・脚本・撮影・編集・出演：塚本晋也　原作：大岡昇平
出演：塚本晋也、リリー・フランキー、中村達也、森 優作、中村優子、山本浩司

第2次世界大戦末期のフィリピン・レイテ島。日本軍の敗戦が色濃くなるなか、田村一等兵は結核を患って部隊を追い出され、はてしない原野をさまようことになる。10代のときに小説『野火』に衝撃を受けた塚本監督は、その映画化に向け始動してから20年以上の歳月をかけ、「今でなければつくれなくなる」という強い思いで、ついに完成。美しい自然のなか、極限状態に追いつめられた兵士たちは、泥と垢にまみれ、人間性が破壊され、つぎつぎと死んでいく。正視に耐えられない戦場の悲惨な現実を直視させる87分は、映画でしか表現できない圧倒的な迫力がみなぎる。戦争の非人道性を真っ向から訴える傑作だ。

塚本晋也（つかもと・しんや）

1960年東京都生まれ。劇場映画デビュー作『鉄男 TETSUO』（89年）でローマ国際ファンタスティック映画祭グランプリ受賞。以降、『六月の蛇』（2002年）、『KOTOKO』（11年）など常に話題作を発表、国際的な人気を誇るカリスマ監督。俳優としても映画やテレビで活躍。

第71回ベネチア国際映画祭コンペティション部門
第39回トロント国際映画祭WAVELENGTHS部門
第19回釜山国際映画祭A Window on Asian Cinema部門
第43回モントリオール・ヌーヴォー映画祭招待作品
第9回アジア・フィルム・アワード監督賞ノミネート

声高なメッセージを言葉で語る映画ではない。だが、非情に徹した描写の底から、静かな叫びが響いてくる。これが戦争だ、と。塚本をはじめ、リリー・フランキー、中村達也、森優作らが、鬼気迫る力演で、まさにその怖さが映画の核心を体現している。
山根貞男（映画評論家　朝日新聞7月24日 夕刊より）